

〈セッション事後報告〉
モイシェ・ポストン理論によるマルクス新解釈の可能性
——『時間・労働・社会』の拓く次元——

報告者: 白井聡(文化学園大学)、野尻英一(早稲田大学)
討論者名: 中村勝己(中央大学)、内田弘(専修大学名誉教授)
世話人(司会): 梅森直之(早稲田大学)

【セッション当日の様相】

本セッションは、10/28(日)午後一時より大会第一会場(一橋大学東一号館1201教室)にて開かれた。フロアへの参加者は50名ほどを集めた。質疑応答も活発に行われ、盛況であった。

【セッション趣旨】

本セッションでは、米国シカゴ大学からラディカルな《社会理論》を発信して注目を集めるモイシェ・ポストンの主著『時間・労働・支配』(筑摩書房、2012年)を取り上げ、そのマルクス解釈史上の評価と、理論的な展望について議論を行った。(Moishe Postone, *Time, Labor, and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory*, Cambridge University Press, 1993)

【報告・討論内容】

セッションではまず白井聡、野尻英一による報告が各二〇分程度おこなわれ、次に中村勝己、内田弘による討論が各十五分ずつおこなわれた。

(1) 白井聡による報告「ポストンのマルクス読解とその意義、検討すべき課題について」

白井聡による報告は、「1. ポストンのマルクス読解の特徴、基本的論理について」「2. その意義と検討すべき課題について」の二点にわたって行なわれ、ポストン理論の概説とその評価を中心になされた。

「1. 概説」においては、次の諸点がポストン理論の特徴として挙げられた。ポストンの主張によれば、既存のマルクス主義のほとんどはすべて分配様式(私的所有と市場経済)への批判を主軸としている点で、マルクスが後期に『要綱』と『資本論』で構成した「カテゴリー的批判」の本質を捉えそこねているものとして批判されるべきである。マルクスは、商品と資本というカテゴリーを立てることで、資本主義的生産が抽象的な社会支配の源泉となり、さらにその抽象的支配がこの社会における動態性と軌道(方向性)を決定していることを分析する理論を構築した。また商品を生産する労働の二重の性格(抽象的および具体的労働)が、商品の二重性(交換価値と使用価値)、富の二重性(価値と物質的富)、時間の二重性(抽象的時間と具体的時間)となって現われていること、しかしこの二重性は(理論によらなければ)不可視であり、抽象的労働の特殊歴史性は隠蔽され、それによって引き起こされる社会変化の本質(歴史

的時間の蓄積)が隠蔽されること、さらにこの隠蔽性の中で、抽象性と具体性の次元の二重性が相互作用しながら、資本主義社会を動的に駆動することが指摘される。重要なことは、資本主義の進展に伴って、その具体性の次元と抽象性の次元との乖離が大きくなり、構造的な緊張(「剪断圧力」とポストンは呼ぶ)が高まることである。ここに資本主義が超克される理論的な可能性が提示される。資本主義の行路において蓄積される歴史的な時間、すなわち蓄積された類一般的諸能力と、それを測る基準として使用される抽象的時間とのあいだの緊張が、社会的な緊張となり、社会を資本主義的な社会形態から切り離す可能性を生み出すことが示唆される。

「2. 意義と課題」については、次のようなことが報告された。まずポストン理論は、たとえば最近ではネグリ／ハートの「マルチチュード論」にも引き継がれている「革命の主体探しゲーム」の呪縛から離脱し得ている点で、画期的と評価できる。次に、マルクスによる商品／資本の分析を資本主義社会の辿る軌道の分析に直結し、環境問題を含めた経済成長の有り方に対する批判的分析のための理論枠を提供していることも大きな利点である。「価値」という非人格的で抽象的な形式の廃絶こそが資本制超克の鍵であるとする点においては、パシュカーニス、廣松渉、岩田弘、馬場宏二らの立論と共通点も有しており、対照研究も望まれる。一方、資本主義の辿る軌道が単一であり、やがて剪断圧力の高まりを迎えるパターンが必然であるとしても、現代の国際的に展開する資本主義経済においては、相対的剰余価値の生産ではなく、資本間の成熟度の格差が絶対的剰余価値の生産構造を構成するという仕組みが中軸となっているように思われる点、検討が必要である。またポストンの展開する「歴史的時間」と「抽象的時間」の二重性の議論は、「贈与」と「等価交換」の二重性の概念へと拡張することで、人間と天然資源との関係をあらためて見つめ直す議論の展開が可能であることも提案された。

(2) 野尻英一による報告「ポストン理論の可能性—価値論の拡充と主体性論への接続」

二番目の報告者、野尻英一による報告の内容は次のようなものであった。野尻はまず、マルクスの理論が元々もっていた文明論的な視野をポストン理論が継承している点の評価する。現代社会と人間存在の形態変化を捉える理論立てをしている点は、近年の日本のマルクス解釈に失われた傾向であり、ネグリ／ハート、ハーヴェイらとならんで学ぶべきものは多い。次に、資本主義社会を貫く「(交換)価値＝抽象的人間労働＝抽象的時間」の定式と、その効果である「トレッドミル効果」「変容と再構成の弁証法」のもたらす社会支配の存在を暴露したことを、ポストンの理論的成果として評価することができる。ポストン理論には、抽象的時間による支配によって生じる資本主義社会に特有の「生きにくさ」「生活の断片化」「豊かさの中での労働時間格差」といった問題、また地球環境を破壊しながら莫大な物質的富を生産することなしには自己を維持することの出来ない資本主義的経済の暴走性の問題に対する理論的アプローチを可能にしているという大きなアドバンテージがある。日本的文脈に即して言えば、「後期マルクスは疎外論を脱却し物象化論である」という廣松渉的読解を貫徹したマルクス読解であるという評価もできる。しかしその一方で、『時間・労働・支配』では、「交換価値＝抽象的労働＝抽象的時間」の等式を成り立たせている「社会的必要

労働時間」という社会的形態（形式）の成立機制について、踏み込んだ分析がなされていないという欠点が指摘できる。

野尻は「社会的必要労働時間」とは一つの社会的な推論形式であると指摘し、本書で〈人間労働の自己媒介性〉と呼ばれる契機に対する分析が必要であることを主張する。ポストンは抽象的労働および価値による支配の物象性／客観性を強調するが、疎外論に陥ることを恐れるあまりに、資本主義社会の再帰的（reflexive）な再構成を可能にしている契機の特定がオミットされている。例えば日本のように資本の有機的構成の高度化が極度に進んだ社会の現状を見ると、仮にポストン／マルクスの言う「時間の社会的分割」がなされ、余分な時間が増えたとしても、その時間を主体は商品空間の再構成に費やしてしまう／現にそうしているのではないか、という疑問が生じる。このような問題意識から野尻からは、〈人間労働の自己媒介性〉による抽象的時間の生成という事態を、人間労働の二重性から生じる労働の自己抽象化のプロセスであるとする事でポストン物象化論を補填する試みが発展的課題として提唱された。

（3）中村勝己による討論（ポストン理論の社会思想史的位置づけとその問題）

中村からは、ポストン理論を主に思想史的観点から位置づける討論が提起された。ポストンの思想について米国内における直接の継承関係は明らかではないが、論の特徴から考えて、属人的支配ではなく構造的支配を問題にする物象化論、米国フランクフルト学派の傾向に属すると理解することができる。米国における「ヘーゲル左派」を自称したA・グールドナーの「自己反省的社会学」や、米『テュロス』誌でフランクフルト学派やイタリア・オペライズモの紹介に努めたP・ピッコーネの「現象学的マルクス主義」の立場（正統派マルクス主義を批判しマルクス『要綱』に着目）等との親近性があると見られる。世界的な文脈で見れば、フランクフルト学派のほかにも、「労働の拒否」「労働の廃絶」を唱えたオペライズモ、とりわけマリオ・トロンティとアントニオ・ネグリとの思想的近縁性がある。日本では、物象化論へのパラダイムチェンジを唱えた廣松渉、近代的労働観からの脱却を唱えた今村仁司に近い。

ポストン理論への評価としては、資本制社会を精緻に分析することと、資本制社会に否定的に向きあうこととの乖離があるのではないかと、との指摘がなされた。近代資本制的に組織された労働の使用を実現する主体は誰なのか。一方でポストン理論が気づかせてくれるのは、今日のポスト・フォーディズムあるいはグローバル金融資本主義を分析する枠組みを見出すことの重要性である。レギュラシオン学派、ハート／ネグリ、D・ハーヴェイ、ポスト・オペライスタらの一連の仕事とポストンの仕事とを対照しつつ、資本制の現状分析のための枠組みとしての有効性が問うことが課題となる。

（4）内田弘による討論（「伝統的マルクス主義」批判基準としての「再帰的理論」とは何か）

内田は、ポストンの理論をマルクスに基づく「再帰的理論」の一種として捉え、評価する。再帰的理論は、歴史的な超越性を徹底して排した理論であり、資本主義社会を批判する自己自身の理論的立場を

も特殊歴史的な立場であることを認める。マルクス自身が資本主義社会自身の言葉で資本主義社会を分析することをその方法としていた。内田は徹底した資本主義内在の立場に立つポストンの立場を、たとえば日本における三木清の先駆的試みと重ね、自由時間論への視点を含めて、刮目すべきものと評価する。

一方で内田は、ポストンの「再帰的理論」はその根拠付けが不十分であると指摘する。ポストンにおいては、使用価値(具体的有用労働)と価値(抽象的人間労働)との相互関係が、並行関係に留まっている。ポストンは、使用価値が抽象される場面、抽象的労働が生成される場を把握しない。本書は社会的媒介の基本形態である価値形態論に論及せず、(交換)価値と使用価値の重層的媒介関係に踏み込んでいないことが指摘できる。さらに『資本論』においては第1部第1章における「具体的労働」と「抽象的労働」との関係の分析は、第6章で展開される「不変資本と可変資本」の關係に継承されるが、ポストンの理論はこの継承を論じていない。資本の生産過程における生きた労働は、具体的労働としては生産手段の使用価値(C)を移転・保存するとともに、抽象的労働としては労働力に投下した価値を再生産しかつそれを超える剰余価値を生み出す(V+M)という、二重の働きを行う。この結果、資本は(C+V+M)として構成される新しい使用価値に再帰するが、ポストンの理論では、このような抽象的価値と使用価値の相互転換が把握されておらず、両者は相互作用するとは言われつつも、並行関係にとどまる。さらにもう一点、ポストンの重要な概念である「トレッドミル効果」であるが、これは「特別剰余価値」という用語で通常は論じられる事柄を、別の概念で論じたものと言える。この結果、その正確な理解に疑問がある。技術革新の結果、先駆的個別資本が社会的平均よりも少ない価値量投入で同じ使用価値量を生産できることによる一時的剰余価値が、特別剰余価値である。しかしポストンはこれを、社会的価値量自体が増加すると誤解する。先駆的技術の一般的普及によって、生産物の新しい社会的価値は先駆的に低かった個別価値の水準まで低下する。ポストンが考えるように、一定の生産物の価値は、増加しいずれ減少するのではなく、一般的傾向的に減少するのである。

ポストンの理論は、以上のような諸点において、マルクス経済学批判をより正確に吸収すれば、さらに発展する可能性がある。

【フロアとの質疑応答】

報告と討論を受けて、フロアからは活発な質問、議論が提起された。マルクスの労働価値説とA・スミス「複雑労働」論との関係、ポストンのいう蓄積される「歴史的時間」と二十世紀の技術革新、特に半導体集積回路やプログラミングによる情報技術との関連、「時間の社会的分割」が実現される未来社会の具体像について、などの議論がフロアと報告・討論者とのあいだに交わされた。

【世話人によるまとめ】

本セッションにおける報告者、討論者による議論を通して、ポストン理論の大きな特性の一つが明らかとなった。それはこの理論が、「蓄積される具体的な歴史的時間」と「一定不変の抽象的時間」という

異なる時間性の弁証法的相互作用として、資本主義の運動を把握している点である。抽象的時間による支配を脱しなければ、いかに物質的富の再分配を行ってもわれわれは資本主義の強制する軌道から離脱することはできない。このような抽象的構造的な支配について分析するためのアプローチをマルクスのテキストに即して抽出しえた功績は大きい。資本主義の超克の途を探るための基礎理論の一つとして、討論において指摘された、論及の不十分な領域を補う諸研究の展開が期待できる。